

ジャーナリズムとその日その日主義

和田洋一

1 日記、雑誌、日刊紙

フランス語のジュール Jour (日)、そしてジャーナル Journal (その日その日の記録・日記・雑誌・新聞)、そのジュールナルが英語の中へ取り入れられ、つづりはそのまま、発音はジャーナルとかわり、そのつぎにジャーナリズム Journalism という言葉が生れた。そのような事情にある限り、ジャーナリズムが「日」と関係をもっていることは明白である。

しかし「日」と関係があるからといって、ジャーナリズムは「日刊」に限定されるということはないだろう。いま、フランス語のジュールナルに「その日その日の記録」という訳語をあたえたが、私は、「その日その日」という言葉と、「毎日」「デイリー」とを区別したいと思っており、区別する必要があると感じている。Journal の Jour は日であるけれども、ジュールナルは「その日その日の記録」であって、「毎日の記録」「デイリーの記録」ではない、と考えたい。

フランスの歴史の流れの中で、最初にあらわれたジュールナルの形態は日記であった。ルネサンスの時期に、フランス人は、他のヨーロッパ人とともに、個人としての意識を強くもち始め、自分が考えたこと、感じたこと、自分が出くわ

した事件を日記につける習慣を身につけ始めた。そしてその日記がジュールナルとよばれたのである。

日記は、毎日欠かさず書きこまれるからジュールナルとよばれたのではなく、その日その日のことが書きこまれるからジュールナルとよばれたのである。一年三六五日のうち、かなりの部分が白紙のままであっても、それだからといって、残りの部分、書きこまれた部分が、日記としての本質を失うことはない。それに反して、三六五日全部ぎっしりと書きこまれていても、その内容がその日その日と何等関係がないとするならば、それは日記、ジュールナルの名に値いしないといわなければならない。きょうめんな人が、一日も休まずその日その日の記録を書きつづけたとするならば、その人の日記は、ジュールナルであるとともに、デイリーであるという、二つの性質をかねそなえたことになるだろう。

フランスの**大百科辞典『グラン・ラルース・アンシクロペディー』**によれば、ジュールナル Journal は、その日その日 jour par jour の出来ごとを語っている文書であると規定されており、その日その日の記録と言いなおすことも許されると思う。 jour par jour といふとき、毎日 chaque jour とはちがつて、きょうとあすとのあいだ、きょうときょうとのあいだの切れ目が意識されており、きょうはきょう、あすはあす、あしたはあしたの風が吹くという非連続の關係がそこには存在する。その日その日の記録である限り、きょうの日記には、病気がやっと直ってうれしいと書かれ、つぎの日には、親しい友人が突然死んで悲しいと書かれているであろう。日記とは、もともとそういうものである。

ジュールナルの第二番目の形態は雑誌であった。フランスのもっとも古い雑誌、同時にもっとも古い学術雑誌として知られている『ジュールナル・デ・サバン』*Journal des Savans* は、一六六五年一月五日の日付けで創刊された。「学問の世界に新しく起りつつある事柄を知らせる」*de faire savoir ce qui se passe de nouveau dan la république des lettres*⁽¹⁾ ことが自らの課題であると声明していたというところで、やがてこれにならって、時事的な内容をもった雑誌がつぎつぎとあらわれ、あるものは自らジュールナルと名のり、あるものは名のらなかつたが、いつとはなしに時事性をもったすべての雑誌がジュールナルとよばれることになり、発行の定期性は最初存在しなかつたが、やがて月一回発行と

か週一回発行とかいうことになっていった。

日記と雑誌とのちがいは明白であるが、共通するものがあるとすれば、それは何であろうか。なぜ二つのちがったものが、ジュルナルという一つの言葉でよばれるようになったのだろうか。『ジュルナル・デ・サバン』は、本来の意味での「その日その日の記録」ではなかった。そのような性質は明らかにぼやけてしまっている。しかし、仮に日曜日だけ時間的余裕のある人が、過去一週間の毎日を思い出しながら記録をつくっていったとすれば、それは日記の名に値いするであろうし、その日一日のことを、夜、ベットにはいる前に書きしるすことが本来の日記であるにしても、ぼやけた形はぼやけた形で認めなければならぬ。

時事性という言葉も、日刊紙の時事性と、週刊誌のそれと、月刊誌のそれとでは、強さの度合いがちがうが、季刊誌といえども時事性がないとはいえないであろう。時事性は、短い期間だけ生きているが、すぐまた死滅してしまうものであって、その短い期間が一日であるか、一週であるか、一月であるかは本質的な問題ではない。雑誌は、永遠の真理を語る場所ではなく、現時点において、人びとが、自分の実生活との関連においてインタレストを感じる事件現象を知らせる場所である。その知識はすぐ古くなり、無用視されることは、始めから見透されているといっていだろうか。非公開の日記と、公開の雑誌、その日その日の記録である日記と、厳密にその日その日の記録とはいえない雑誌とは、まるで別物であるようで、しかも内容の時事性、その日その日主義の故に共通しているのである。

ジュルナルの第三番目の形態は日刊紙である。フランス最初の日刊紙「ジュルナル・ドゥ・パリ」の創刊は一七七七年で、日記があらわれ出したのは一五世紀の後半、雑誌は一七世紀の後半、日刊紙は一八世紀の後半という順序になる。日刊紙が出たからといって、雑誌が消えてなくなったわけではなく、ただ日刊紙の勢力、ウエイトは、その後じりじりと大きくなり、ジュルナルという言葉は新聞雑誌全体を含めた言葉となり、日刊紙はジュルナルの代表選手ともなった。一九世紀にはいって、イギリスは、先にのべたように、フランス語のジュルナルを自国語内にとりいれ、やがてジャ

ーナリズムという言葉がつけられ、フランスはこれを輸入し直してジャーナリズムをお家風にジュールナリズムと改める。ドイツは、フランスに雑誌が創刊されると、二〇年ほどおかれてこれになり、学術雑誌をぼつりぼつり出し始める。フランス語の男性名詞ジュールナルは、ドイツ語にとりいれられると中性名詞になってしまうが、一八世紀前半は、外来語 *das Journal* が、かなりの程度の流行現象を示すことになる。

一九世紀から二〇世紀への移り变りの時期になると英語のジャーナリズムは、企業精神のおう盛なアメリカン・ジャーナリズム、モダーン・ジャーナリズムとして太平洋をこえて日本に流れこみ、一方、七つの海を支配していた大英帝国の、伝統を誇るジャーナリズム、若々しいニュー・ジャーナリズムもまた日本に影響をあたえつづけた。

(一) E. H. Lehmann の „Einführung in die Zeitschriftenkunde“, Leipzig, 1936. 二五ページに引用されている。

2 日本人にとってのジャーナリズム

Journalism は、明治の後期くらい、新聞の研究を志す日本人、ないしは英米の印刷物に親しむ日本人が、日常しばしばつかって来た言葉である。News にかんしては、中国の例にならって新聞という訳語を採用することにし、Newspaper にかんしては、中国の「報」をそのまま採用せず、新聞紙という訳語を当てることにした日本人は、Journalism にたいして適当な訳語を見つけることが、いつまでたってもできなかった。

大阪朝日の記者であり、熱心な新聞研究者でもあった原田棟一郎は、ジャーナリズムの訳語として新聞主義ではどうもしっくりしないと思ひ、新聞道がふさわしいのではなからうかと考えた。そして『新聞道』という題の書物を一九二七年（昭和二年）に大阪出版社から刊行した。原田は、ジャーナリズムには、崇高な宗教的精神、ヨーロッパ中世の騎士道が生きているはずだと考えて、新聞道を思いついたのであるが、賛成者はどうもすくなかったようである。

物理学者の寺田寅彦（吉村冬彦）は、一九三四年（昭和九年）「ジャーナリズム雑感⁽¹⁾」と題する随想の中で「ジャーナリズムの直訳は日々主義であり、その日その日主義である」と書いている。しかし彼にならって、ジャーナリズムを日々主義、あるいはその日その日主義とよぶ者は、どこにもあらわれてこなかった。その日その日主義は、直訳としては正しいが、江戸っ子の宵越しの金はもたないとか、キリストの「明日のことを思いわずらうなかれ、今日の苦勞は今日一日にて足れり」というのもその日その日主義といえないことはなく、ジャーナリズムの訳語としては、不適當であるといわねばならない。

一九三〇年（昭和五年）には『総合ジャーナリズム講座』が勢よく登場した。そして大体月に一冊ずつ出て、一二冊で完了したが、この講座の刊行以前は、ジャーナリズム、ジャーナリズムを表題に出した書物など一冊もなかったのが、以後は『ジャーナリズムの理論と現象』（喜多壯一郎著、一九三二年、千倉書房刊）、『現代ジャーナリズム研究』（木村毅著、三三年、公人書房刊）、『現代ジャーナリズム論』（杉山平助著、三五年、白楊社刊）、『ジャーナリズム講話』（大宅壮一著、三五年、白楊社刊）、『動くジャーナリズム』（四至本八郎著、三七年、ダイヤモンド社刊）とあいつぎ、片仮名が無遠慮にまかり通ることになった。

そこにいたるまでの長い期間、Journalism は九分通り新聞と訳され、それで特にさしつかえはないとされてきた。残りの一分は、新聞事業、新聞業、新聞雑誌などであった。『総合ジャーナリズム講座』の企画者は、「新聞ジャーナリズム」「雑誌ジャーナリズム」のほかに「出版ジャーナリズム」の存在を公認し、「出版ジャーナリズム」にかんする欄を、毎号設けたが、それ以前には Journalism を日本語になおすにあたって、新聞雑誌出版というように、漢字を六つもならべることが誰もやらなかった。

日本の新聞研究家が、英米で刊行されている参考書を読んで勉強しようというとき、その参考書の題名には Journalism という文字がはいっていることが一番多かったと思われる。もちろん、Newspaper もすくなくなかったし、Press

の場合もあった。

一九三四年（昭和九年）に発行された原田棟一郎著『米國新聞史論』（立命館出版部刊）の巻末には、米國ならびに英國の新聞史研究に必要な参考文献が、ずらりとならんでいるが、それら文献から統計をとってみると、Journalismを題名に使用しているもの一冊、Newspaper九冊、Press六冊、ほかにFleet Street, The Fourth Estate, Journalismがそれぞれ一、二冊ずつということになっている。杉村楚人冠の『新聞の話』（一九二九年、東京朝日新聞社刊）にあげられている参考文献を見わたしても事情はほぼ同じで、当時の新聞研究家は、ほとんど誰も彼も、ニュースペーパーにかんする本、ジャーナリズムにかんする本、プレスにかんする本を読み、そのあいだに區別らしいものを認めず、そして自分で何か書くというときには、すべて「新聞」を通じていたのである。History of Journalismという本があれば、戦後のわれわれは、ジャーナリズム史と訳すであろうけれども、楚人冠などは新聞史と訳して涼しい風をしており、ジャーナリズムという言葉の持つ特別の意味だとかニュアンスにたいして気をつかっていない。

『総合ジャーナリズム講座』全十二冊を完成した直後、出版元の内外社は、記念論集として『現代ジャーナリズムの理論と動向』を刊行したが、序文の中でつぎのような見解をのべている。

「凡そ、現代人にとって、一日として新聞、雑誌、ラヂオ、出版等によるジャーナリズムを離れた世界というものは考え得られない。ジャーナリズムこそは、あらゆる意味に於て現代文化の尖端であり、同時に亦その中軸である。かくてジャーナリズムの正しい理論と把握とが、時代の切実な要求となったのは当然の勢である。

本社はこの要求に応じて、一九三〇年の秋、『総合ジャーナリズム講座』の刊行に着手し……（以下略）
つまり、新聞はジャーナリズムの代表選手ではあるだろうけれども、ジャーナリズム即新聞とみなし、雑誌、ラヂオ、出版を無視するかのごとく、新聞新聞ということとは、もはや許されないと判断がそこにあり、ジャーナリズムのための適当な訳語がみつからないとすれば、片仮名のままの表記でいくべきではないか、それでいこうという決断があっ

たと見るべきである。

今まで一度も本の表題にならなかったことのないジャーナリズム、そのジャーナリズムの講座を一二冊もつづけて出そうというのであるから、第一巻の冒頭には「ジャーナリズムとは何か」と題する大論文がのらなければならなかったと思うが、そういう論文はのらなかつた。内外社の中でそういう企画はたてられたが、執筆の引受け手がなかつたということなのかも知れない。第一巻の冒頭に掲載された論文は「ブルジョア・ジャーナリズム」、筆者は、マルクシズムへの理解を示していた評論家長谷川如是閑であつた。

「ブルジョア・ジャーナリズム」というテーマは、もちろん講座の企画者の側からあたえられたものだろうが、如是閑にもし気があれば、論文の前段で、ジャーナリズムとは何かという問題に本格的にとりくみ、後段で、資本主義社会のジャーナリズム、ブルジョア・ジャーナリズムについて論じることができたと思う。しかし如是閑には、そんな気はなかつた。如是閑は、ジャーナリズムという言葉に、特に魅力を感じたり、食欲をそそられたりということはなかつたのである。彼は「ブルジョア・ジャーナリズム」をつぎのような書き出しで始めている。

「ジャーナリズムという言葉は、通常その場合に應じて『新聞』又は『新聞記者』の方法、態度、行動、精神、職業、事業、等々の、とにかく新聞又は新聞記者に關する一切を、又は部分を意味するものとして用いられ、それよりして或は『新聞的』の又は『新聞記者的』のすべてのものに寄せられる、半ば侮蔑的の言葉として使いられてゐるのである。」

如是閑は、新聞紙本来の性質についてのべたり、新聞は本来かくかくであるべきだということをのべたりするのが好きであり、「ブルジョア・ジャーナリズム」の中でも、新聞發生の動機についてのべたりしている。しかし、ジャーナリズムという言葉が生れてくるその歴史、ジャーナルは本来何を意味していたか、その語源は、そしてそれはどのような変つていったかについて、如是閑は興味をもとうとはしなかつた。如是閑は戦後、「朝日新聞」に「新聞および新聞人」を連載し（一九五四年）、その中でジャーナリズムの社会的意義について論じたが、その場合でも彼は、ひとが通

俗の意味で「ジャーナリズム」というときは、新聞の生理よりは、むしろ病理を見ているように思われる、とか、世人は、ジャーナリズムの健全の生理状態を見ないで、たまたま病的となった新聞意識を見ているのである、とか、四分の一世紀前の「ブルジョア・ジャーナリズム」を執筆したときと同じような調子で、ジャーナリズム侮蔑の問題をとりあげている。日本のジャーナリズム論を豊かにすることに、如是閑ほどの程度貢献しえたのか疑問であるが、今はそのこの検討はさしひかえておこう。『総合ジャーナリズム講座』第十巻には、矢野 矢という無名の人物が「新聞語の起因」という文章を掲載しており、新聞語の一つとして「ジャーナル」をとりあげ、詳細厳密ではないが、ひと通りの説明を加えている。仮名づかいと横文字の明白な誤りだけを訂正して、前半の部分をつぎに紹介する。

「ジュリウス・シーザーがローマ大帝国を建設して威光を四海に輝やかした時代に、張札や立札を要所要所に建てて政府の告示機関とし、地方からローマへ集まる旅人の注意とか、政府の命令とかを知らせたものに (Acta Senatus) アクタ、セナタがあつて、西洋の新聞の起源であると考えられている。アクタ、セナタは後に (Acta diurna populi Romani) アクタ、デウルナ、ポプリ、ローマニ、に通達された。diurna はラテン語の diurnus、毎日の事である。此の diurna がフランスに入つて Journal となり、新聞の名称に用いられて、一七七七年に Journal de Paris が同国最初の日刊紙となった。此の言葉は最少し前にイギリスへ渡つてジャーナルとなり、一六九〇年にウォーセスター市で Berrow's Worcester Journal が発行された。同紙は名称と組織は変転したが田舎新聞のさきがけとなり、今だに継続された歴史を持つ新聞である。アメリカでも一七二七年ボストン市に New English Weekly Journal 紙が発行され、英米仏の各国に次第に多く用いられる様になつた。」

お粗末な文章を引用して恐縮であるが、古代ローマの公報機関としての “Acta diurna populi Romani” の diurna から、フランス語の Journal へ、そしてフランス語のジュールナルがイギリスへ輸入され、ジャーナルをもとにしてジャーナリズムという新しい言葉がつけられたということは、矢野 矢氏の独創的見解でもなんでもなく、すでに権威

ある辞書類によって承認されているところである。

戸坂潤は、一九三一年（昭和六年）の『思想』七月号に「アカデミーとジャーナリズム」という論文を掲載し、これは今日においてもなお読まれているが、彼がこの論文を執筆するに当っては、前年秋から引きつづき刊行されていた『総合ジャーナリズム講座』が、何等かの意味でしげきになっていたということは、想像してもさしつかえないだろう。戸坂はこの中で「ジャーナリズム (Journalism) はその文字が示している通り、日々 (Jour) に属するものが一個の原理となったものである。Journal とは、であるから、主観的には日記 (アミエルの Journal intime の如き) を、客観的には新聞紙類を指すことが出来る。ジャーナリズムは日々、その日の生活と関係している。……」

当時、ジャーナリズムを啓蒙的に論じるに当っては、最少限、フランス語のジュール、ジュールナル、日記を意味すると同時に新聞雑誌を意味するジュールナルについて触れなければならなかったと思うが、もうひとつさかのぼって古代ローマの公報 “Acta diurna populi Romani” について、そしてそのタイトルの中の diurna (diurnus) の意味について考えることも、必要であつたと思われる。

日本の新聞研究家の中には、古代ローマの公報に関心をもつた人もあつたが、実際は研究の足がかりも何にもないもので、ヨーロッパの学者の業績、特にドイツの学者カール・ビューヒャー Karl Bücher の著書にたよることが多かつた。

(一) 『中央公論』九月号所載。

3 古代ローマの公報手段

ライプチヒ大学の教授として新聞学や経済学を講じていたカール・ビューヒャーの『国民経済の成立』⁽¹⁾が、権田保之
ジャーナリズムとその日その日主義

助によって日本語に移されたのは、一九一七年（大正六年）で、当初は『経済的文明史論』という表題をあたえられていた。関東大震災のあと、新たに印刷しなおされ、その機会に題名も『国民経済の成立』に改められた。

この書物は、著者の論文や講演の原稿を集めたもので、それらは互いに独立していた。「新聞業の起源」もその中の一つで、日本の新聞研究家たちは、この論文に目をつけ、この論文から多く教えられたようである。彼等が新聞発生の歴史についてのべ、「紙」以前の時代にまでさかのぼるとき、古代ローマの「アクタ・セナートゥス」「アクタ・ディウルナ・ポプリ・ロマーニ」に触れるのが常であったが、その場合の知識は、しばしばビューヒャーの「新聞業の起源」からの借物であった。

杉村楚人冠も『新聞の話』執筆に当って、ビューヒャーのお世話になった一人であるが、彼は第二章「新聞紙の起源」の始めのところで、つぎのような二つのことを語っている。

第一は、新聞紙の起源を語る者は、必ず中国の「京報」と、ローマの二種類の「アクタ」を引合いに出すけれども、誰もその正体を見たものはないから、これに関しては、いつ頃できたものか、どんなものであったか、異説紛々いづれを信じていいかわからない、という主張である。

杉村は、参考文献として、権田保之助訳の『国民経済の成立』をあげており、ビューヒャーのお世話になったことにまちがいはないが、異説紛々といっているのであるから、ビューヒャー以外の説についても、いろいろと勉強していたのかもしれない。杉村自身、正体を見たわけではなく、確かめる手段もなく、強い好奇心をもったわけでもないが、ただ、新聞紙の起源ということになると、必ず引合いに出される話なので、自分も一応の説明を加えておくまでであるといっている。

第二は、二種類の「アクタ」の中の一つ、「アクタ・ディウルナ・ポプリ・ロマーニ」の「ディウルナ」が、ディウルナル (Diurnal) となり、ジュルナル (Journal) となり、終に今日の英語の「ジャーナル」なる語に転じたという点

は、多小の興味を引く、という発言である。

杉村は、多小の興味を感じたらしいけれども、といってそれ以上深入りはしなかったが、私は杉村よりは一段と強く興味を感じているので、深入りはできないが、一步か二歩、ジャーナル、ジャーナリズムの語源の問題に立ち入ってみたいと思う。

早稲田大学の教授であり、新聞の研究者であった喜多壮一郎は、杉村の『新聞の話』が刊行されたのと同じ年に『新聞展望台』（春陽堂刊）を公にしたが、これは論文随筆集であって、そのまっさきに「新聞紙の進化過程」という文章が掲載されている。

喜多は、この論文につづいて「ローマ時代における新聞紙的手段としての『アクタ・デウルナ』と『アクタ・セネタス』』という論文を発表しており、これは彼の著書『ジャーナリズムの理論と現象』⁽²⁾の中におさめられている。この論文を通して、喜多が、権田保之助訳の『国民経済の成立』、さらにユージェーヌ・アタンの古典的名著『フランスにおける新聞の政治的・文学的歴史』を種本にしていること、アタンはビクトク・レクレールの研究業績『古代ローマ人のジュルナル』のお世話になっているので、喜多は間接にレクレールのお世話にもなっていることを、われわれは知ることができる。

先にのべた「新聞紙の進化過程」という論文の中で、喜多は、新聞「紙」以前の時代の公布形態としての“*Acta senatus*”と“*Acta diurna populi Romani*”について語っているが、この二つは「石膏を塗りつけた木板に文字を刻りつけて、ローマの街まちの所要所に、日毎、いわゆるデイリーに、掲示されたものであった。」と説明している。

ビューヒャーの原書では「石膏を塗りつけた板に文字が *aufmalen* されていた」となっていて、「刻りつけて」とは書かれていない。（権田の訳では、石膏を塗布せる板上に文字を書いて行なわれた、となっている。）ローマの街まちの

要所所ということも、ビュヒーヤーは言っていないが、アタンないレクレールの研究の中に根拠が見出せるのかどうか。先に紹介した矢野 矢の説明文の中にも「要所所」が出てくるが、その根拠は喜多の論文なのか、それともほかに求められるのか。古代ローマの公布形態に関心をもつ者にとって、これらは決してどうでもよい問題ではないが、私が今ここで取りあげようとしているのは、「日毎、いわゆるデイリーに、揭示された」という部分である。「アクタ・ディウルナ」のディウルナは、形容詞ディウルヌスが語尾変化をしたものであり、ディウルヌスの意味を辞書に求めれば、「日々の」と記されているので、「日毎、いわゆるデイリー」の意味に喜多はとつたのである。

私のラテン語の知識は、不確かであり、幼稚であり、ラテン語の意味について、とやかく論じる資格があるとは思っていないが、私は、ジャーナリズムという言葉の本来の意味を明らかにしたい、いろいろと考えちがいがあられるらしいので、これを是正したい、そのためにはフランス語の *Journal* がどのような意味に用いられていたかを知らねばならないし、その語源であるラテン語にまでさかのぼらねばならないといふふうに考えている。それでディウルヌスの意味について検討せざるをえないのであるが、私の結論を先に言ってしまうえば、ディウルヌスは、今までしばしば「日毎の」「デイリー」という意味にとられてきたけれども、そうではないということである。

今世紀の新聞は、規則正しく、毎日毎日新しいニュースを読者に伝えてくれる。それと同じように、古代のローマ政庁のお役人、「アクタ・ディウルナ・ポプリ・ロマーニ」の係官は、規則正しく、毎日毎日、きのうのニュースを揭示板から抹消し、かわりに新しいニュースを書きしるすというサービスをやったかどうか。サービスは仮にいとわらないにしても、報道するにたる新しい出来ごとが、毎日うまいぐあいに起ったかどうか。うまいぐあいに起ったにしても、それをキャッチするための網をいつも用意していたかどうか。答えは、おそらくノウであらう。

「アクタ・ディウルナ・ポプリ・ロマーニ」というタイトルを考え出したのは、ユリウス・カエサルであったのか、それとも彼の部下であったかどうかは明らかでないが、「アクタ・ディウルナ」というタイトルを考え出したその人物

は、今日の新聞社が、重要と思われるホット・ニュースを紙に書いて、社の建物の外にはり、通行人に読んでもらう、あれと同じような感覚をもっていたとはとうてい思えない。

デイリーとは、一日も休まない、あるいは日曜日をのぞいては休まない、という意味である。誰かが、ラテン語のデイウルナは、「毎日の」、「デイリー」の意味だというと、現代人の中には、すぐ、古代にもデイリーの公報手段が存在していたかのような錯覚を起す人も出てくるようである。

先程の矢野 矢の「張札や立札を要所要所に建てて政府の告示機関とし」にしても、近世の江戸の施設が、そのまま古代ローマにもありえたように頭の中で勝手に考えたということではないだろうか。

つぎに言葉の面からいうと、daily に当るラテン語は、キャッセルの辞書には見つからず、diurnus の英語訳を求めると I. lasting for a day; II. happening by day となっていて、いずれにしてもデイリーの意味でないことは、明らかである。

では、アクタ・デイウルナのデイウルナが、「毎日の」という意味ではないとすれば、一体どういう意味かという問いにたいして、私は「その日その日」と答えたい。アクタ・デイウルナとは、その日その日の出来ごと、事件であって、何か重要な出来ごと、国民に知らせるべき出来ごとが起れば、ローマ政庁は、いそいで掲示板を利用するが、毎日新しいニュースを伝達する義務など何等負っていないし、掲示されたニュースが三日、四日そのままになっていても、誰もあやしいとは思わない。「アクタ・デイウルナ・ポプリ・ロマーニ」はそのようなものであったと考える。

鉏路新聞の記者として勤め、東京朝日の校閲係の仕事にも従事した石川啄木は、一九一二年（大正元年）に「我等の一団と彼」という短篇を書いたが、その中で、主人公の「私」はつぎのように語っている。

「日が暮れて、為事の終った時、我々にはもう何も残っていない。我々の取扱う事件は其の日、其の日に起って来る事件で有って、決して前から予期し、乃至は順序を立てて置く事は許されない。」

新聞記者の生活は、その日その日で切られている。きょう働いている記者は、あすの紙面にのせる原稿のことだけを考えている。時間をかけてゆっくり調べ、さまざまな角度から丁寧に検討する余裕を、彼はあたえられていない。彼は取材のため、午前は東へ走り、午後は西へ走る。そしてあわただしく原稿を作成してデスクへ呈出したとたん、彼の仕事はおわる。もちろんこれは明治の話であるが、日がしづかに暮れていくとき、彼にとっては、もはや何もすべきことはない。アカデミーのよどんだ空気の中で、永遠の真理を求めてこつこつと仕事をしている研究者と、何と大きなちがいであろう。

戸坂潤は「アカデミーとジャーナリズム」を書き、ジャーナリズムの反対物としてのアカデミーを横において比較検討することによって、ジャーナリズムの姿を始めて明らかにしたといえる。そして現在においては、ジャーナリズムの反対物ではなくて、かなり共通な面をそなえているとともに、ちがった面をもそなえているマス・コミュニケーションとの比較がとぎたま行なわれている。私は、辻村明の「マス・コミュニケーションとジャーナリズム」⁽³⁾、早川善治郎の「マス・コミュニケーション論とジャーナリズム論」⁽⁴⁾にそれぞれ教えられることが多かったが、辻村の論文を読んだとき、私は改めて、四〇年前の『総合ジャーナリズム』において、ジャーナリズムとは何かが問われなかったこと、ジャーナリズムという言葉が先進諸国で何を意味してきたかが語られなかったことを思いかえした。早川の論文の中では、ジャーナリズムとは何かを説明するに当って、『社会学辞典』(一九五三年、有斐閣刊)がよりどころにされている。引用された部分は、ジャーナリズムの定義としては、まちがっていないであろうけれども、二〇世紀の四〇年代から使われ出したマス・コミュニケーションという新しい言葉と、ながい歴史をもち、しかも国々でそれぞれちがった変遷をとっているジャーナリズムという古い言葉とを対比させるに当っては、やはり定義以上のものが必要ではなかったであろうか。

結論的に言うならば、第一には、伝達される内容がその日の出来ごとと関係していること、第二には、その日

その日の出来ごとが、翌日ただちに、あるいは一週間後に、あるいは一月後に、多数の人びとに伝達されること、この二つがそろったとき、それはジャーナリズムであると言える。死後に出版された日記は、生前当時のなまなましい社会的、政治的現実の記録であるとしても、時間の流れの中で、時事性、ニュース性を喪失させられてしまっていて、それをフランス人はジュルナルとよぶであろうけれども、ジュルナリスムとはよばないであろう。テレビの伝達形式は、文字通りその日その日であるが、内容のかなり多くの部分は、時事性、ニュース性とは無関係である。マス・コミュニケーションとジャーナリズムとのそのようなちがいは、早川によっても指摘されるべきではなかっただろうか。

(1) Karl Bücher: „Die Entstehung der Volkswirtschaft“ Vorträge und Aufsätze. Tübingen, 1912.

(2) 一九三二年(昭和七年)千倉書房刊。

(3) 林惠海教授遷厝記念論文集『日本社会学の課題』一九五六年(昭和三十一年)有斐閣刊。

(4) 『新聞学評論』第一八号(一九六九年)日本新聞学会編。